

# 若き日の物語をしるばる絵の発見

## 小説の鬼、宇野浩二と、国画創作協会の鬼才・野長瀬晩花

インバウンドにも古き浪花情緒を求めたくなる道頓堀だが、100年もの昔、道頓堀は芝居の見巧者<sup>みこうしや</sup>を唸らせる劇場街であり、全国から若い文化人やアーティストが集う青春の街であった。「カフェー」に彼らは集まり、意気投合したり、議論したり、深夜まで騒ぐこともあった。

「カフェー」には、珈琲専門店、ベーカリー、ソーダ・ファウンテン、キャバレーなどの営業形態があったが、郷土研究誌『上方』によると、大阪での草創期のカフェーは、「パンの会」で著名な銀座プランタン開店とそう変わらない明治末か大正初期、西区川口に開店したカフエ・キサラギである。江之子島の旧大阪府庁舎のドームをエキゾチックにヴェニス<sup>ヴェニス</sup>の寺院に見立て、作家や画家が芸術談義を楽しんだ。

その後、詩歌の「キタルラ」同人が集ったカフェ・ナンバや、道頓堀では洋画家足立源一郎ゆかりの「旗のバー」ことキャバレー・ツ・パノンが開店する。パノンは、スタンドグラスやビアブリー<sup>ビアブリー</sup>の版画など内装も華やかで、「五色の酒」のカクテルで知られた。

現在の道頓堀今井の東側にあったカフェ・パウリスタも有名で、ここでの面白いエピソードが伝わる。

“小説の鬼”こと宇野浩二(1891~1961)は、自伝的小説『青春期』に学生時代の夏、宗右衛門町の伯父の家に帰省し、昼食後は、翌朝まで、24時間営業のパウリスタに毎日居つづけたと記す。珈琲でねばり、書齋がわりにカフェーで過ごすのは、フランス象徴派や頹廢派の詩人のまねであり、大阪の酷暑を避ける手段でもあった。店の黒板に「何月何日、午後何時ごろ、ここにある」と伝言をメモし、パウリスタは宇野の個人事務所ようになっていく。

夜も更けて二時三時、店員も減り、客も宇野だけである。静まりかえった店内。突然扉が開き、男がはいってきた。つかつかつかと近づいてきて「あなたは変わっていますね」と話しかける。

こんな夜中でも、いつも、いつまでも店の同じ所に腰かけているのが変だと男は言うのだ。しかし、宇野以上に変わっているのは男の風体で、長髪に「西洋婦人の帽子」をかぶり、赤いリボン<sup>リボン</sup>を飾った先に「二三箇の小さい人形の首」がむすびつけられていた。

このキテレッツなファッションの人物こそ「日本画家でありながら、洋画家のような服装」をまとい「後に国画会の会員になった」という野長瀬晩花(1889~1964)その人である。『青春期』には上野原晩花の名で登場する。



女性用の帽子をかぶった晩花。伊達男である。宇野浩二との出会い夜の姿を偲ぼせる。

晩花は、現在の和歌山県田辺市中辺路町に生まれた。14歳で大阪の中川蘆月<sup>なかがわ りづづ</sup>に学んだ後、京都市立絵画専門学校別科の一期生となる。大阪には親友のこれまた个性的な秦テルヲ<sup>あひてる</sup>がいて、大正2(1913)年の文展では、京都会場前に天幕張り移動式カフェ「カフェー・タワー」を設けて「バンカ・テルヲ展」を催している。宇野との出会いも大正はじめだろう。

深夜の道頓堀。文士らしい風貌の小説家と近代のカブキ者を装う洒落な画家。どちらも二十代の青年芸術家だ。2人のやり取りのうち早い夏の朝が白み、牛乳配達<sup>牛乳配達</sup>の音が聞こえてきた。

大正7(1918)年、晩花は、<sup>つちだばくせん</sup>土田麦僊、<sup>むらかみかかく</sup>村上華岳、<sup>みさきばらしほう</sup>榊原紫峰、<sup>おのちつきやう</sup>小野竹喬らと国画創作協会の結成に参加。ゴーギャン<sup>ゴーギャン</sup>を思わせる鮮やかな原色が作品にひろがる。晩花の長男は黒澤明の助監督もつとめた映画監督・野長瀬三摩地である。

晩花が当時の道頓堀を描いた作品を見つけた(表紙図版)。画帖のなかの一図で「道頓堀の図」と題され、エプロン姿のカフェーの「女給」が街を見下ろしている。画面上半分は万国旗が張りめぐらされ、タケノコのような形に往来の群衆が描かれる。サインの「火露男」は、晩花の本名「弘男」を当て字にしたもの。画帖には、仲間の秦テルオや榊原紫峰の絵もあり、宇野浩二が小説に書き残した青春の道頓堀の暑い日々が、晩花の絵によっても、はじめて確認できた。



道頓堀の絵葉書。通りをまたいで万国旗や芝居小屋の旗が吊られている。

### 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」[北野恒富展]「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など。